

2022年12月4日（日）「イエスの律法」

ハイデルベルク信仰問答より

問4 律法は私たちに何を要求していますか。

答え イエス・キリストはマタイ福音書 22:37-40 の中で、このことを要約して教えています。

イエスは言われた。『心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の戒めである。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つの戒めに、律法全体と預言者とが、かかっているのだ。（マタイ 22:37-40）

問5 あなたはこれらの全部を、完全に守ることができますか。

答え できません。なぜならば、生まれつき、神と隣人とを憎む傾向にあるからであります。

8月よりヨハネの黙示録の講解説教を始めましたが、それと並行して語っていくべき箇所を考えておりました。祈りの中で示されてきたのが、以前から私の中で温めてきた『ハイデルベルク信仰問答』です。既に礼拝の中で問1～3より語らせていただきましたが、2020年から祈禱会のためにショートメッセージを作成して参加者の皆様に配布してまいりました。ただ、その取組みを始めたのが問11からですので、問4～10がポツカリ空いてしまっているのが私の中での心残りでした。この機会を用いてもう一度学び直し、教会の皆様と教理の一致を目指していきたいと思えます。

念のため振り返りますと、問1～3では以下のような問答がありました。

問1 生きている時も、死ぬ時も、あなたの唯一の慰めは何ですか。

答え 生きている時も、死ぬ時も、身も魂も、私自身のもではなく、私の信頼する救い主イエス・キリストのものであるということであります。

問2 あなたが、この慰めという祝福の中に生きかつ死ぬことができるために、あなたはどれだけのことを知らねばならないのですか。

答え 三つのことあります。第一には、私の罪と悲惨がいかに大きいかということ。第二には、私が、どのようにして、すべての罪とその悲惨な結果から自由にされたかということ。第三には、この救いに対して、私はどのような感謝を神に捧げるべきかということあります。

問3 あなたは、どこで、あなたの罪とその悲惨な結果を知るのですか。

答え 神の律法からです。

私たちが「罪と悲惨」の状態を理解するために律法が与えられている。その理解なしに福音は存在しない。では、律法は人間に何を要求してきているのか。それが問4の内容です。

問4 律法は私たちに何を要求していますか。

答え イエス・キリストはマタイ福音書 22:37-40 の中で、このことを要約して教えています。

律法についてはガラテヤ書の講解を通して繰り返し学びましたが、それは「神の聖なる御心」であり、人が聖く生きる道（人が如何に生き、如何に礼拝すべきか）を指し示したものです。そこに書かれている通りに生きれば人は幸せになる。神が望まれる道を歩むことこそ、人の本来あるべき生き方なのだ。それが律法理解の原則であります。

ところが、本問答書で「律法の要求」について説明されるとき、ガラテヤ書とはずいぶん異なるアプローチであることに驚かされます。ここではシンプルに、主イエスの律法観だけが示されているのです。これはハイデルベルク信仰問答独特の解釈であり、優れた律法理解であります。文脈で捉える必要がありますので、少し前から読んでみましょう。

ファリサイ派の人々は、イエスがサドカイ派の人々を言い込められたと聞いて、一緒に集まった。そのうちの一人、律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねた。「先生、律法の中で、どの戒めが最も重要でしょうか。」イエスは言われた。「『心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の戒めである。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つの戒めに、律法全体と預言者とが、かかっているのだ。」（マタイ 22:34-40）

ここでは「神を愛せよ」という第一の戒めと「隣人を愛せよ」という第二の戒めが呈示されています。これらが律法の要求するところの総括／要約であり、私たちに「罪と悲惨」を認識させるものだということです。初めて聖書を読む人がこれを聞いたなら、「なるほど、イエスはなかなかいいことを言っているな」と思われるかもしれません。神と人を愛する、善良な人間であるならそこに異議を唱える人は少ないでしょう。しかし、本問答書は何と、この戒めこそが人の心に自らの「罪と悲惨」を認識させると言うのです。

ここでユダヤ教指導者たちと主イエスとのやり取りが出てきた文脈をよく見てみましょう。彼らが質問してきた動機は「**イエスを試そうとして**」であって、最初から教えを乞う姿勢などないことが分かります。神の子を試み陥れようとする態度は悪魔から出てくる。事実、彼らのうちの多くはサタンに魂を売った人々であり、文字としては旧約聖書の律法に通じていましたが、それを自らの利権のために都合よく解釈し、民衆を法的に縛り、変更できないものとしていました。年月を費やして伝統を築き上げ、民の服従を動かぬものとしつつあったところに、イエスが現れたのです。宗教を利用して己の利を貪っているユダヤ教指導者たちのあり方に疑問を抱いていた民は、イエスのいのちある教えに激しく心を揺さぶられました。そして、イエスのことばと御業にこそ真理があることを感じ、弟子がおびただしく増えていきました。そのような「新しい事態」に不安を覚えた宗教指導者たちは、どうにかしてイエスの尻尾を掴んでやろうと、度々やって来ては挑戦してきました。この問答はその一つに過ぎませんが、彼らが

畏をかけようとして問うた事柄が、とてつもない主イエスの回答を導き出してしまったのです。

主イエスはこの挑戦者たちに対し、聖書のことばそのものをもってお答えになります。ここで引用されている聖句は、申命 6:5 とレビ 19:18 であり、これら二つが瞬時に主イエスの口から出てきたということは、主がどんな時にも意識して行なっていたことなのだと理解することができます。単に十戒の一つひとつの戒めを暗唱して覚えているということではない。十戒全体を覆い、旧約律法のすべてを総括するものとして、これら二つの原則が示されたのです。そして、主の確信に満ちた返答には、ご自分はそれを 100%守り行なっているという「権威」がありました。

実のところ、この二つの問いが本気で突きつけられるとき、罪人はオロオロするはずなのです。真正面から「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しているか」「あなたは隣人を自分のように愛しているか」と問われるとき、目を伏せたくなる。そのように生きたいと願いながら、できていない自分を知っているからです。

私たちは毎週日曜日に礼拝に集まりますが、六日間どのように過ごしてきたかが心に問われているのではないのでしょうか。この感覚は、礼拝で奉仕をささげる人にとって、切実に迫ってくるものであるはずです。バタバタ、ザワザワとした気持ちでは心からの奉仕をささげることができない。六日間どのように歩んできたかが、真っ直ぐな心で主の御前に出られるかどうかを決定づける。この緊張感を学ぶために奉仕は存在すると言ってもよいかもしれません。奉仕とは信仰者を成長させるのです。祈りには私たちの信仰が現れる。説教には説教者のすべてが投影される。実際、講壇ではいろんなことが脳裏を駆け巡るものです。六日間の日々が思い出され、ふさわしくなかった自分の歩みによって心責められることもあります。だからこそ、奉仕者は次の主日の奉仕に向けて六日間を整えて歩んでいる必要があります、罪を犯したならば奉仕の準備を始める前に悔い改める必要があります。そして、礼拝が始まる時には心静かに主と向き合えるように、礼拝を中心とした生活形成が求められているのです。これはもちろん、奉仕者だけに言えることではなく、礼拝者全員に当てはまることであります。

これは、音楽家やアスリートが本番に向かう姿勢と似ています。その一瞬のためにベストを尽くして準備し、最大限のパフォーマンスを出すことができるよう自分を整える。そのために多くのことを我慢し、自分を打ち叩いて生活を律する面があります。楽器の発表会を経験してきた方はよく分かるでしょう。本番で良いパフォーマンスを出すには、その日だけ心を整えたのでは絶対にうまくいかないのです。何週間、何ヶ月も前から本番をイメージし、日頃から如何に本番に近い状態で練習し、自分をそこに近づけているかが重要です。それでも本番は緊張するものですが、その緊張すら想定内とすることができているとき、聴衆を巻き込んだ素晴らしい経験ができるのです。私も多くの失敗をしてきた中で、何度か忘れられない演奏をしたことがあります。

幾分話が逸れたかもしれませんが、礼拝に臨む姿勢もこれと非常に似たところがあると、私は説教者としての人生の中で感じてきました。しかし、次の問5では、神と人とを愛することに失敗し続けている人間の姿が暴かれます。

問5 あなたはこれらの全部を、完全に守ることができますか。

答え できません。なぜならば、生まれつき、神と隣人とを憎む傾向にあるからです。

ここでは厳しい指摘がなされています。神と人を愛するというを「完全に守る」どころの話ではない。「生まれつき、神と隣人とを憎む傾向にある」とまで言われているのです。これに対しては多少の反論があるかもしれませんが。「確かに私は完全に神と人を愛することはできません。しかし、いくら何でも神と隣人を憎むということはしていない」と。しかし、果たして人間はそのように言うのでしょうか。私たちが日頃、誰もいないところで口にしていう言葉、心の中で考えたことがすべて露わになったとしたら、言い逃れのできる人はいるのでしょうか。

余談になりますが、IT 技術によって目指されている監視管理社会は、私たちが普段交わしている会話だけでなく、どこへ行ったかの行動履歴もすべて記録しているのかもしれませんが。スマートフォンや IoT 家電にそのような機能が具わっていないと誰が言い切れるのでしょうか。もしこのような話を聞いて、少しでも「嫌だな」と感じたとするならば、私たちは心のどこかに人には知られたくないものを持っているということになります。もちろん IT は神ではありません。神はそれ以上に私たちの心の奥底までご存知であり、知性、感情、意志のすべてをもって愛することを求めておられます。そして、神を愛することと隣人を愛することとは、表裏一体の関係にあるのです。

律法の役割は、私たちに「罪と悲惨」を認識させることだと冒頭で述べられました。このように聞くと、律法とは冷たく人を裁くものでしかないと思われがちです。しかし、実際の律法の役割とはそれに止まるものではありません。律法とは神への道しるべであり、人に絶望を与えると同時に悔い改めの心を起こさせ、神との真の関係を構築させようとしているのです。アンドレ・ペリーは「律法は福音である」とまで言っています。しかし、福音となるためにはどうしても聖霊の働きがなくてはならない。主イエスへの信仰がなければ、律法は福音とはなりません。主イエスを信じるとき、私たちは主イエスが神と人を愛されたと同じ心をいただくことができるのです。そして、その心こそ律法を全うしていくものとなる。その結果、律法は福音となるのです。すべての要は信仰であり、その信仰を与える聖霊の働きによるのです。

【祈り】

律法により、人の生きるべき道を示し給うた、天の父なる神様。この律法の書は 4000 年に亘って研究され続けてきていますが、それでも人類はこれを全うすることができずにいます。神の御心と遠く離れた生き方をしてしまう私たちがいるのです。しかし、主イエスはその律法の要求に応える道を明確に示してくださいました。それは、神と人を愛するという、実にシンプルな答えでした。そのような生き方ができるように、主イエスは私たちに聖霊を遣わしてくださいました。聖霊に満たされ、心からの喜びをもって、その道を歩むことができるよう、お導きください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
人に聖なる律法を与え、歩むべき道を示し給うた、父なる神の愛、
神と人を愛するという、律法の心を教え給うた、主イエス・キリストの恵み、
律法を福音となすため、人の心に宿り給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。